

晩

サン・ピエトロ（ローマ）

うつむきつつ進み出る、十字の中心
今、私は祈りを捧げる——神にではなく
人間の希望、そして生活そのものに捧げる

オルガンの響きは呵責無い時の流れ
聖歌の中の「主」^{ドミネ}とは人そのものであり
2つの残響が歴史そのものである

人のつま先が明日を決め、その後ろに
轍が残る——喜びと哀しみと諦めと
そしてまた新たな一歩が踏み出される

信徒に非ずして聖堂^{うち}の中に祈る
これ、主に対する冒瀆なりと言うなら
答えよう、主は我々である、と

(1984.3.23)